

カルタゴの巻

第1章 地中海の覇権を賭けたカルタゴとローマの興亡



FAO から見たフォロ・ロマーノ

チュニジア、2011年。この国からアラブの春が始まった。これはチュニジアを代表するジャスミンの花にちなんでジャスミン革命とも呼ばれる。23年間に及ぶベン・アリー独裁政権が倒され、その余波はエジプト、リビア、イエメンへと伝播した。

この地にフェニキア人によるカルタゴが建国されたのは、今から約2800年前のことである。カルタゴ建国の様子はターナーによって描かれ、ロンドンのナショナル・ギャラリーに展示されている^(注1)。カルタゴの他にもマルタ、モティア、ウティカ、カディスらの植民市が建設された^(注2)。その背景として、オリエントにおいて大国化したアッシリアの脅威があげられる。これらの植民市のうち、モティアは後にカルタゴのシチリアにおける基地となった。そのモティアと対岸は海上の道で繋がれていたが、今では水没した石堤の上を馬車が通っている。

ローマもこれと同時期にロムルスによって建国された。彼らはギリシア人やエトルリア人が興味を示さないパラティーノの丘など7つの低い丘、そこは防御には不適であっても外に開かれているという性質を持つ、に居住地を定めた。当章は地中海の覇権をめぐるカルタゴとローマの間で争われた「ポエニ戦争^(注3)」と呼ばれる物語である。脇役のギリシアも、この時期から内紛や人口過剰により、黒海沿岸や南イタリア等への植民活動を本格化させている。

ポエニ戦争勃発まで

ポエニ戦争直前の構図を述べる前に、ここに至るまでの三者の動きを概観したい。まずは、世界史を習ったことのある者なら知らぬことはない「ペルシア戦争」から話を進めよう。

カルタゴとローマが建国されて3世紀を経た前492年、オリエントの大国アケメネス朝ペルシアがギリシアに侵攻した。ギリシア人が植民して経済的繁栄を謳歌していたエーゲ海一帯のポリス群とペルシアとの紛争が発端である。この第一次ペルシア戦争ではマラトンの戦いでアテネの重装歩兵がダレイオス王に勝利したが、前480年、クセルクセス王の侵攻によって第二次ペルシア戦争に突入した。今回はギリシア側もアテネ海軍を中心に陸軍主体のスパルタが連携し迎え撃った。まずは、大挙して北方から回り込んでくるペルシア軍をレオニダス率いるスパルタの精鋭が天険テルモピレーにて迎撃し全滅、映画「300」での感動的シーンでもある。さらに南下してきたペルシア軍に対して、アテネは陸上で焦土戦術をとるとともに、サラミスの海戦で勝利を収めた。

ギリシアは全3回にわたるペルシア戦争に勝利したものの、ギリシア人同士の連帯を欠く性質は相変わらずのものであり、アテネ、スパルタ、テーベと主導ポリスが移り変わる「ペロポネス戦争」が続く。澄み切った空のもと白い家々が紺碧の海に映えるエーゲ海、ギリシアの政治はこの透明感とは無縁の世界であった。この戦争で、テーベのエパミノンドスは単斜陣と呼ばれる陣形を使用、スパルタ軍を粉砕した。この陣形は、最初に自軍の最も強力な部

隊を相手の翼側に衝突させて粉碎、後方に回り込むことによって包囲を達成しようとするものであり、後のアレキサンダー大王によっても対ペルシア戦に使用された。さらに、カルタゴのハンニバルによってさらに洗練度を高め、第1次世界大戦における当初の独軍作戦計画であったシュリーフェンプラン^(注4)や第2次世界大戦のマンシュタイン参謀の立案による「三日月型鎌刈」作戦^(注5)もその応用である。

ギリシアがこのように内部抗争に明け暮れている間に、その北方ではフィリッポス2世に率いられるマケドニアが台頭、テーベをカイロネイアの戦いで破り、前336年に20歳のアレキサンダーに継承された。アレキサンダーは自国をギリシア圏と考えていたようであり、ペルシアのギリシア侵攻への報復として対ペルシア戦争に着手した。ところが、グラニコス、イッソス、ガウガメラと戦勝を続け支配領域を拡大させるにつれ、統治の必要性からマケドニア・ギリシア人とペルシア人の東西融和が進められることになり、遠くバクトリアの地までギリシア植民地が建設された。おかげで、中国西域のミーラン（鄯善）^(注6)からギリシア起源の有翼天使像が発掘され、日本でも奈良法隆寺の回廊にその面影が見られる。アレキサンダーの死後、彼の大帝国は3分割され、マケドニア本国はアンティゴノスによって統治された。



奈良法隆寺の回廊

柱の中ほどに持たせた僅かなふくらみは、パルテノン
神殿でも採用されており、エンタシスとよばれる。

それでは、フェニキアの植民市としてスタートしたカルタゴはどうであったろうか。カルタゴの貿易路は、フェニキアが形作った母市チュロス（地中海東岸）と鉱物資源の産地であるスペインを結ぶネットワークの再編である。このカルタゴの交易において、西方の銀と交換

されるものは、オリエント由来のテラコッタ製の小像、陶器、ガラス製品等の工芸品である。栗田伸子氏は『興亡の世界史3 通商国家カルタゴ』において、「以前の西地中海におけるフェニキア人の交易網が植民市や交易所、停泊地の水平的なネットワークであったらしいのに対し、カルタゴ市が他の西地中海諸地域に新たに植民したり、既存のフェニキア人の定住地を再編したりする形で、カルタゴを中心とする一極的かつ垂直的なネットワークが形成されていったように見えるのである。」と述べている。この過程でギリシア人との軋轢が生じるとともに、イタリア半島南部とシチリアの大部分はギリシア人、シチリア西海岸、コルシカ、サルディニア、スペイン南部はカルタゴ人というように、前5世紀までに地中海の東西で住み分けができていた。チュニスの北東12kmにあるピュルサの丘の麓に居住区域が形作られ、その南側に約200隻を収容できた円形の軍港と長方形の商業港が建設され、この商業港には多くの外国商人が集っていた。現在でもその港は遺されている。

ローマとの関係は紀元前6世紀から始まる。前508年に第1回の条約が結ばれており、カルタゴの勢力圏はサルディニア、シチリア西岸、リビアと広く設定されているのに対し、ローマは狭く、共存ではあるが、ローマがカルタゴの海上支配を事実上認めた形になっている。この条約は後に2回更新されているが、基本的にはカルタゴの海上権益を認めたものである。この一連の条約でシチリアのシラクサがローマの勢力圏外であると明確に定められていたのか、今でも未解明である。

カルタゴの経済的繁栄とは対照的に、フェニキア本国はペルシア戦争でペルシア海軍の主力としての戦争協力を強いられ、現在のレバノン、シリア沿岸部にあったシドン、チュロス、ビュブロス等の都市は経済的に疲弊、最後まで残った要塞都市チュロスも前332年にアレキサンダーによる攻撃を受けて消滅した。ビュブロスにはフェニキア時代の城壁、ローマ時代の円形劇場などが遺され、現在名ジュバイルとしてユネスコ世界遺産に登録されている。ここでは、アルファベットのもとになったフェニキア文字がアヒラム王の石棺に刻まれている。

このペルシア戦争初期を通じて、カルタゴは中立の態度で臨んだが、クセルクセス王からの働きもあって、第2次ペルシア戦争時の前480年にシチリアに侵攻した。しかし、このヒメラの戦いではハミルカル率いるカルタゴ軍はシラクサの僭主^(注7)ゲロンに大敗し、新たな国家体制が模索されることとなる。ギリシア系の重装歩兵に敗れたことで、その必要性を認識し、中堅農民層を擁する領域を確保しようとしたのである。パグラダス川(現・メジェルダ川)流域の内陸に領域を拡大させて肥沃な耕地を手に入れ、小麦やイチジクを産出するようになった。後のローマ時代には、当地域はエジプトと並んで小麦を多量に生産する属州となった。さらに、錫を産出するブリタニア(イギリス)へ進出するとともに、アフリカ西岸まで遠征し、「火を噴き上げる神々の戦車」とされる火山が見えるカメルーンにまで到達したとの記録もある。これは黄金を目的として60隻の船に生活物資を積み込んで出発した「ハンノの航海」として知られるものである。

このような改革を経て、カルタゴは経済力を回復させた。これによって、傭兵のみならず市民兵をも動員して、前 410 年頃からシチリアへの進出は再び強化され、シラクサを核とするギリシア人との抗争が常態化した。この抗争を通じて、カルタゴに内在する弱点も露呈した。領土を内陸側に多少拡大したことによってその弱点を少し緩和させたが、基本的に都市国家であり動員できる兵力に限界があることや、傭兵依存のため戦闘力に劣ることであった。これによって、本国が混乱しているギリシア人を相手とするシチリアでの戦いにさえも決着がつかないのであった。このカルタゴが、陸上戦力ではギリシアに遙かに勝るローマと対戦することになる。

他方のローマはどうであっただろうか。先に、ローマは建国時にギリシア人やエトルリア人が関心を持たない場所を居住地に選んだことを述べた。これが開発経済学で言う「幼稚産業の保護」と同等の効果を生むこととなった。当初はサビーニ族など弱い相手と戦いながら同化させ、着実に力をつけていく。同時に、エトルリア人からも干拓や道路舗装のような実用的技術を模倣し学んでいった。学んでこそ、幼稚産業の保護に値する。産業分野だけに限定されるわけではなく、社会適応性を含めて、何も学ばない学生期間や見習い期間は幼稚産業の保護ではなく非能率産業の保護と言われる。真の「幼稚産業の保護」は、より正確には「発展可能産業の保護」と言うべきであろう。

前 509 年、ローマは王制を廃止し、民会で選ばれた任期が 1 年の執政官（コンスル）2 人が内政と軍事の最高責任者となる共和制を導入する。この頃から、徐々に強力な外敵にも当たるようになり、また、文化水準の高いギリシアに視察団を派遣したりする。ローマも青年期にかかってきたのである。前 400 年頃からエトルリア人、ケルト人、サムニウム族との抗争で重装歩兵戦術が鍛えられる。国内体制としては、前 376 年に「リキニウス法」が制定され、次いで、政府の全ての要職が平民に解放され、その経験者には元老院の議席を取得する権利が与えられた。元老院議員となるためには貴族・平民の区別なく経験と能力が基準となった。何と明治期の日本を見ているようではないか。開花期にある国や民族にはこのような精神の澁刺さが見られる。この元老院議員が執政官を選出する母体となり、その執政官が戦場での指揮官となって数々の戦いに臨んでいくことになる。

ローマの受けた最大の試練は、北部ギリシアのエピロス王国ピュロス王による侵攻である。ピュロスは未だローマに属していないタラント市の委託を受けたのである。ピュロスはギリシア世界で戦術の名人という高い評判を得ていた。第 1 回のヘラクレアの戦いは前 280 年、両軍ほぼ同数の 2 万 5 千の激突であり、ピュロス軍の両翼に配置された象部隊がローマの騎兵を蹴散らし、ローマ軍は包囲されて大敗した。ここで、ピュロスは首都ローマを衝こうと考えたが、ローマ連合からの離反が意外と少なく、ローマも新たな軍勢を繰り出せたため、ピュロスはローマとの戦いに戦意を喪失し、シチリアに転進した。ここから「果実を生まない虚しい勝利」という意味の「ピュロスの勝利」という語が生まれた。

カルタゴ、ローマともに建国から約5世紀。ポエニ戦争前夜には、今の用語でいえば1人当たりGDPでみた経済大国であるが陸上戦には弱いカルタゴと、その北方に、この時代としては広いパワーベースと世界最強の重装歩兵を有する陸軍国の新興ローマ、その中間に触媒となったシチリアのギリシア人勢力があった。また、ギリシア本国の周囲にはアレキサンダー大王の版図を継承したマケドニア、シリア、エジプトの3勢力が存在した。この時点で、エジプトは親ローマである。

ポエニ戦争勃発

前264年、シチリアのメッシーナからローマに同盟を求める使者が送られてきた。メッシーナは同じギリシア系のシラクサと紛争を続けてきたのだが、今回はカルタゴに救援を求めたのに対し、今度はローマに同盟をもちかけたのである。ローマから見れば、もしメッシーナの気が変わりカルタゴとの同盟が成立したならば、ローマの目と鼻の先のところにカルタゴの要衝が出来上がることとなる。メッシーナ海峡を挟んで、イタリア半島側にレッチョ、シチリア側にメッシーナの街があり、海峡の幅は最短で3kmでしかない。こここのところの機微が塩野氏の『ローマ人の物語Ⅱ ハンニバル戦記』に、「たとえ海が間にあろうと、この距離がこの思いが、ローマとカルタゴの対決の端緒になったのであった。」と目に浮かぶように描かれている。

ここまではローマもカルタゴを海の覇者として認め、海上権益をしぶしぶであろうと追認してきた。しかし、イタリア半島を統一した今、カルタゴ以外に有力な仮想敵国は存在しない。事前の双方の戦力比較を行うと、両国の性質が後のドイツとイギリスのように異なりすぎ、まともな戦いにならないのである。とりあえず、ローマはシチリアに侵攻、カルタゴとの関係の深いアグリジェントを占領する。しかし、ここまでであった。カルタゴが120隻の艦船を保有するのに対して、ローマには海軍力が無かった。まず、艦隊の建造から始まった。かつてピュロスとの戦いのときにカルタゴから援助してもらったものや、カルタゴから捕獲したものを模倣した。問題は操船技術である。ところが誰が考えついたのか、船にカラスと呼ばれる棧橋を装備して相手の船にかけ渡して飛び乗り陸上戦のように戦おうという戦術が考案された。この新戦術によってローマは第1回のミラエ岬沖海戦に勝利した(前260年)。その後、ローマは230隻の艦隊を整備した。ここでわかるように、ローマは強力な陸上戦力に加えて艦船建造経済力によってもカルタゴを凌駕しており、両国の戦力比はパリティではなく、海上戦闘の経験がないという点を除いては、もともとローマ有利であった。カルタゴは戦争回避の方策を講じたかといえば、海上戦力の圧倒的優位を信じて、シチリアは別としても本国が戦場になるとは空想だにしなかったことであろう。

ローマは第2回のエクノモス海戦(前256年)にも勝ち、カルタゴ北東のボン岬に上陸する。ところが、今回はカルタゴ側の策にはまるとともに、艦隊も暴風雨による大損害を受けた。その後、前247年からシチリアでカルタゴのハミルカル・バルカが活躍するが、本国からの救援が不十分で戦局打開への有効打とはなりえなかった。さらに、要職にあるローマ市民が

私財を投げ打って戦時国債を購入し 200 隻の艦隊を再建したため、カルタゴは制海権を失ない、前 241 年、ローマが戦勝という形で講和条約が結ばれた。これによってローマはシチリアの他、サルディニアとコルシカを獲得し、初めての属州とされた。ローマには余裕があった。カルタゴとの戦いが一段落した前 232 年、ポー川を越えて北方に侵攻、アルプス以南のケルト属を討ち、ローマの同盟者に取り込んだ。

戦いに敗れたハミルカルは前 237 年にイベリア半島に渡り、銀鉱山を開発するとともに、原住民の平定を行ない、精鋭の軍隊を育成した。それまではカルタゴは陸上の常備軍を持たず、必要に応じてカネの力で傭兵を使用していた。ところが、第 1 次ポエニ戦争において傭兵がローマ重装歩兵の敵ではないことが明白になり、自前の陸上戦力を整備しようとしたのである。ただし、スペイン人、リビア人やアフリカのヌミディア人などの種族による混成部隊であるところが、ローマ市民によるローマ軍とは異なる。ハミルカルらバルカ家一門の強烈な反ローマ感情は、シチリアで善戦していたにもかかわらず、本国を牛耳る大土地所有者のハンノ家の協力を得られなかったことや^(注8)、ローマとの和平条約締結における条件がシチリアの全面明け渡しであったにもかかわらず、後からの言いがかりでサルディニアやコルシカを没収されたことにある。

彼らはスペインを打倒ローマの拠点に作り変えようとしたのである。前 221 年、ハミルカルを継いだ娘婿ハズドルバルが没すると、ハミルカルの子ハニバルが総督として後を継ぎ、ローマへの報復を誓う。アレキサンダーが 20 歳にしてマケドニア軍を継承したのと同様に、ハニバルもこの時、26 歳の若者であった。

歴史に多少の興味のある者ならば、象部隊を率いたハニバルが雪のアルプスを越えてローマに攻め込み、カンネーの戦いでローマ軍を殲滅したということくらいは習う。どこまで習うかは習う側の力量による。最近の大学教育では教える側の力量によるとされているが。ところが、ナポリ国立博物館に所蔵されるハニバル像は何と苦悩に満ちた表情ではないか。これがアレキサンダーと並び称される人物像であろうか。ハニバル個人に関して、戦を通じた側面での記録は多いが、人間性に関しては、長谷川博隆氏『カルタゴ人の世界』で、「側近にギリシア語の教師であったソシュロスを擁し、ヘレニズム世界の君主・将軍の系列に連なる。」と紹介されている。ハニバルはソシュロスの話を聞き、アレキサンダーになりきろうとしたのであろう。ここから第 2 次ポエニ戦争を追いかけてみよう。

第 2 次ポエニ戦争の発端はサグンツムにある。サグンツムはスペイン内のエブロ川以南に位置するギリシア系の都市であるが、ハズドルバルとローマの間では、エブロ条約によってエブロ川以南はカルタゴの勢力圏であることが確認されていた。前 219 年、ここをハニバルが攻めたのである。ローマは戦争突入を決定、ハニバルも協定の有無にかかわらずそうなることを承知した上での行動である。両者ともやる気十分であった。ただ、戦力比がローマに著しく有利に傾いているこの時に、なぜ保守派の多いカルタゴ本国の元老院が戦争への決

意を固めたのか、経緯がよくわからない。元老院議員の中にはハンノ家のように大土地所有者の利益代表もいたが、第一次ポエニ戦争で海外領をローマに奪われたことによって生活の糧を奪われた多数の交易従事者もカルタゴ市内に帰還させられていたようである。この段階では、ローマはハンニバルの意図がエブロ川以南あるいはスペイン全土の制圧にあるのか、イタリア侵攻にあるのか、わかっていなかった。

サグンツムは 8 カ月の攻防の末に落城、ローマは当時マッシリアと呼ばれた現マルセイユに執政官プブリウス・コルネリウス・スキピオの 2 個軍団を派遣し、ハンニバルに対抗する。マッシリアはローマと友好関係が深いギリシア系の都市であり、ローマはここを経由してブリタニアの錫を入手していた。翌年 5 月、ハンニバルはスペインにおける新たな根拠地のカルタヘナ（カルタゴ＝ノヴァ）を出発、ここは旧来からの根拠地であったジブラルタル北岸のカディスよりも約 400 km ローマに近い東方になる。ローマの読み反して、内陸部を行軍、ピレネー山脈、ローヌ川とアルプスを越えてイタリアに進攻しようとする。ハンニバルはなぜ行軍に適した地中海沿いに進攻しなかったのか。海軍力がなかったのである。もちろんカルタゴ本国には幾ばくかの艦船が存在していたが、彼の意のままに使えるものではなかった。これに対し、ローマには十分な海上戦力が存在し、常に後方を攪乱、遮断することができた。しかし、ハンニバルも初秋のアルプス越えで半数に近い戦力を失うという代償を払った。夏場の通過が最良なのだが、予定が少し遅れたのであろう。ただ、これによってイタリアにおける食糧の現地調達は容易になった。

ハンニバルの作戦意図が明らかになるにつれ、スキピオは弟のグネウス・コルネリウス・スキピオをスペイン戦線に残してイタリアに引き返し、予備の 2 個軍団を合わせて、北イタリアでのハンニバルとの決戦に備えようとする。このとき、ハンニバルはローマと敵対してきたガリア人を加勢させようと懐柔工作を行っているが、本体は 2 万 6 千、これに対して、ローマは 75 万の動員能力を持つ。もちろん、兵糧・兵站・輸送と経済活動への制約で、75 万を同時に 1 点に集中することはできない。

初戦はポー川の渡河をめぐるティチーノの騎兵戦であり、ローマの執政官があわや捕虜にされるところを、父親と同名のスキピオが救出した。このコルネリウス・スキピオは後にアフリカのザマでハンニバルと対戦することになるが、この敗戦の後、エミリウス・パウルスへの配属となる。ここにシチリアから北上してきた執政官センプローニウス率いる 2 個軍団が合流するが、トレッピアの会戦で、ハンニバルはあたかもカンネーの戦いの予行演習であるかのようにこれを撃滅する。カルタゴ軍の両翼を担当するヌミディア兵を中心とする騎兵戦力が圧倒的に強いのである。

ハンニバルはボローニャで越冬を終え、翌年 4 月、アペニン山脈をフィレンツェに向けて南下、ローマを衝く位置にあり、かつてローマに敗れたエトルリア人の多いトスカナでの決戦を試み、トランジメーノ湖畔で地勢と気象を利用して再びローマ軍を殲滅した。しかし、エ

トルリア人をローマ連合から切り離そうとするハンニバルの政治的意図は実現しなかった。

3回にわたる会戦の大敗に学び、ローマの新執政官ファビウスはハンニバルとの決戦を避け、持久戦に持ち込もうとする。これは極めて合理的な作戦であるが、消極策がいつまで市民の支持を得られるか保証はない。一方、ハンニバルはローマ連合に加盟する都市の多い南イタリアのカンパーニャ地方に移動、ローマ連合の切り崩しを図るとともに、カルタゴ本国との連携拠点を作ろうとする。

前 216 年、ローマの元老院は同盟都市の離反を心配するとともに、市民はしびれを切らし始める。ここに会戦の方針が決定され、ローマは2人の執政官エミリウス・パウルスとヴァッロの下に8万7千を戦線に投入する。対するハンニバル側は、ガリア人傭兵を含めて5万である。ハンニバルは、ローマがアドリア海に近い穀倉地帯バーリの近郊に作ってあったカンネーの食料基地を略奪し、ローマ軍を決戦に誘出する。カンネーはプーリアの州都バーリから北西に50 km、バルレッタという町からオフアント川を西に少し上ったところにある。

8月2日の乾いた夏の日、両軍は布陣を終える。ローマはいつもどおり、中央の厚い中央突破を目指す横一線の構えである。一方、ハンニバルの中央部は弓型になって前方に突き出しており、そこにガリア軽装歩兵が配置されている。両軍とも両翼は騎兵の担当である。この陣構えで激突すれば、通常ならローマがガリア歩兵を蹴散らし、瞬時に勝敗が決するはずである。ところが、ガリア歩兵には後退を許す指示が出されていた。ローマの重装歩兵は後退するガリア兵を追撃し、一見、勝ち戦さのように見える。ところが、少し目を離して見ると、ガリア兵の後退とローマ重装歩兵の突出によって、カルタゴの陣形は単斜陣を左右両側に組み合わせた形となり、その中にローマ兵が吸い込まれるように突入していくのがわかる。両翼からの包囲の輪が閉じられ、あたかも二艘巻きで巻くかのように包囲することによって、包囲の効率が極めて高まったのである。ローマ軍は三度目の殲滅を蒙ることとなった。包囲を逃れたのは僅か4,200にすぎないが、その中に、何という運命の巡り合わせであろうか、再びスキピオがいた。完膚なきまでに叩きのめされた大敗北という授業料を払って、身をもってハンニバルの戦いぶりを学習したのである。

ハンニバルの強さは何と言っても騎兵にある。騎兵の一つの使い方は追撃にある。戦場において損害の多くは敗走中に生じる。騎兵を追撃に使用し戦果を拡大させることは誰にでもできることである。司馬遼太郎『坂の上の雲』が騎兵を有効に使うのは天才のみによって可能であると述べたように、アレキサンダーやハンニバルは流動的な戦局の中で、敵の側面を崩し後方に回り込ませる用兵を用いたのである。もう一つの使い方は、敵の遙か後方に向かって深く深く浸透する用兵である。日露戦争においてこれが満州戦線でクロパトキンの過敏な神経を刺激したのであった。後に騎兵の役割は戦車によってとって替わられる。凡庸な指揮官の下では戦車隊は歩兵の中にパラパラと分散されて配備され、敵の機関銃からの弾避けのように考えられていたのであるが、ドイツ軍のグーデーリアンらの将軍によって集中使用と突

破、後方への浸透という機甲戦術が編み出されていったのである。

このカンネーの大勝利によってもローマ連合は崩壊せず、中部イタリアのカンパーニャ地方のカプアと周辺の4都市が離反するにとどまり、ローマ本拠を衝くことを断念せざるを得なかった。ハンニバルの快進撃もここまでであった。戦術的勝利をもって戦略的勝利に変換できなかつた。叩いても叩いても新たな部隊を繰り出してくる、ハンニバルが戦っているローマとはそういう相手であった。あたかも太平洋戦争においてニューギニアとソロモン方面の米軍相手に航空戦を挑んでいるラバウル台南航空隊のようなものだ。いくら精強といえども徐々に擦り減っていくが、本国からの補充は来ない。米軍の場合は、広大な国土による人口と工業生産力がその背景であり単純なのであるが、ローマの場合にはローマ連合という芸術的な政治感覚の所産である。ハンニバルとローマの対決は、日本史で言えば上杉謙信と徳川家康というふうになるだろうか。こうも動員できる兵力に差がついてしまえば、ハンニバルといえども南部イタリアに押し込められるしかない。しかし、ハンニバルは次の手を打った。

前215年、ハンニバルはマケドニアのフィリッポス5世と同盟を結んだ。マケドニアとローマはバルカン半島のアドリア海に面したイリリア地方で紛争を起こし、ハンニバルがイタリアに攻め込んでくるまではローマが攻勢に出ていた。ただし、マケドニアはアドリア海を渡らないとローマを攻められないという問題を抱えていた。また、この同盟締結に際してマケドニアの使者クセノファネスがローマに捕えられ、ローマの対応が容易になった。一方、シラクサでは僭主ヒエロンが死亡し、クーデターによって再びハンニバル側に立つこととなり、イタリア戦線では、ハンニバルが前213年にタラントを攻略した。スペインではローマが優勢に進めていたが、前211年、ハンニバルの次男ハシュドルバルによってローマ軍は敗北、それまでの成果が無に帰した。このように、カルタゴ優勢かと思われた。

ところが、ローマも次々と手を打っていく。マケドニアに対しては、ローマはアドリア海側の海上戦力を強化する。アエトリア人の対マケドニア蜂起を支援、また、マケドニアに脅かされてきた小アジア西部のペルガモンにも働きかけた。このような包囲網によってマケドニアは封じ込まれる。翌、前213年、シチリアではローマが攻勢に出て優位となり、シラクサは前211年に陥落する。また、前210年には弱冠25歳のスキピオがスペイン戦線における司令官として選出された。本来は40歳以上の執政官または法務官が司令官として任じられるのであるが、彼の場合は前法務官としてであった。戦場で采配を振るう人材が払底していたのである。しかし、ローマは柔軟性を失ってはいなかった。こうして、ハンニバルとの対戦から多くを習ったスキピオがスペインに派遣され、前209年にカルタヘナが陥落、スペインにおける最終決戦である前206年のイリパの戦いでは、スキピオがカルタゴ拠点のカディスへの退路を断つ位置に布陣して勝利し、スペイン全土が崩壊する。

イタリア半島でもマルケルスらの連携策によってローマがタラントを奪取。ローマから四方に伸びた街道によって、ハンニバルとの直接対決を回避し、ハンニバルのいない場所を攻め

るという機動的なゲリラ作戦の実施を可能とした。これによって、補充力を欠くハンニバルは徐々にではあるが出血を余儀なくされたのである。この期間、シリアは中立、エジプトはローマとの同盟関係にあった。



アッピア街道

舗装された街道の整備はローマ軍団の機動的な運用を可能にした。

カルタゴに傾きかかった戦局は、マケドニア、シチリア、イタリア本土の全てでローマ優勢となり、スペインは制圧され、ハンニバルはイタリア半島南部に押し込まれた。ここで、ローマはスキピオを執政官としてシチリアを完全に制圧し、しかる後にカルタゴ本国を衝く作戦に出た。前 204 年、スキピオは 2 万 6 千の兵を率いてシチリアのマルサラを発ち、カルタゴのウティカに上陸する。ここで、スキピオはヌミディアのマシニッサとの同盟関係を再確認する。カルタゴ本国軍は敗れ、ローマとの講和が締結されようとする。ところが、カルタゴ内の主戦派がハンニバルをイタリアの戦場から呼び戻し、最後の決戦となるザマの会戦に突入する。

前 202 年の秋、両軍はザマの平原に陣を展開する。ここに、ハンニバルは 45 歳、一方のスキピオは 33 歳、ティチーノの騎兵戦で相見えてから 16 年が経過していた。ハンニバルの軍勢は 4 万六千、一方、スキピオは 4 万、騎兵戦力ではヌミディアのマシニッサを加勢したスキピオが上回るが、ハンニバルは 80 頭の象部隊を伴っている。これをどう使うかがこの戦いの鍵であった。両雄の無言の会見に続き、戦いの火蓋はハンニバル象軍による横一戦の突進と、スキピオ騎兵による左右からの攻撃によって切って落とされた。スキピオは象軍による攻撃を事前に予想していた。通常は軽装歩兵と重装歩兵は横一線に展開するのであるが、この日は小隊ごとの間に象の通り道を作っていた。ハンニバルの重戦車の突進は空振りに終わったのである。その後には、カンネーと同じく、騎兵戦力に優る側による包囲戦が続く。

ザマの戦いは、後のクルスクの戦いの如き展開となった。クルスクの大戦車戦と言われるが、それは本質を突いた表現ではない。クルスクではドイツのタイガー重戦車はロシアの縦深対戦車壕陣地において地雷と対戦車砲によって頓挫した。地雷原を迂回し予定侵入路に誘導させた戦車に対しては、バックフロントと言われ5~10門の対戦車砲を同時に指揮するシステムが採用された。戦車の進入路を升目状に区分し、それぞれの升目に対して、事前に照準を合わせておくのである。それでも生き残った戦車に対しては壕内に待機していた歩兵が空気吸入口に火炎瓶を投げつけたり、装甲の薄い側面・背面に重機銃を浴びせて安価に処理した。ロシアの多連装ロケット砲カチューシャや機関銃陣地からの射撃によって歩兵が戦車に随伴できなかったのである。タイガー戦車の突進が阻止された後、ロシアの快速T34戦車が雲霞のごとく逆襲をかけ、戦いの帰趨は決した。ハンニバルも、スキピオの象部隊への対抗策を予想していれば、象の後を直ちに重装歩兵が追い、ローマ兵が象部隊への対応のみに専念できないようにする、あるいは敵司令官スキピオの前面に象を密集させて中央一点突破を狙うという、的をスキピオ1人の首に絞った作戦に出たであろう。

ハンニバルは自分の戦い方をマスターしたスキピオに敗れた。後の前193年にこの2人は小アジアのエフェソスで再開する。ハンニバルはカルタゴを追われ、ギリシア侵攻を図るシリアのアンティオコス3世のもとに軍事顧問として身を寄せていた。誰を最高の武将であると思うかというスキピオの問いに対して、ハンニバルは第1にアレキサンダー、第2にピュロス王、第3に自分の名を挙げる。ピュロス王を挙げたことはハンニバルの謙遜であろう。彼はローマに攻め込んだだけで何もできなかったのである。次に、アレキサンダーとの比較。私はハンニバルの方を上位に位置付けたい。両者とも戦は名人である。しかし、ハンニバルはザマの敗戦後におけるカルタゴ経済の建て直しにも行政長官（スフェス）として手腕を発揮したのである。現在までの歴史を見渡しても、ハンニバルと比肩できる人物はそういない。ナポレオンはどうであろうか。彼も戦勝を続けたが、その勝ち振りがあまり冴えない。勝ち方が際どい上に、兵員の損害が多く、カンネーやザマの会戦のように鮮やかではない（大橋武夫『兵法ナポレオン』など）。どうも彼の戦勝は、フランス革命を経て国民皆兵制がしかれ、安いコストで次々と兵隊を調達できたことに依存しているようだ。ハンニバル級を強いて挙げるとすれば曹操孟徳であろうか。彼は赤壁で大敗し、その後も潼関や定軍山の戦いで苦戦しているが、それを策謀能力で補っている。また、アレキサンダーやハンニバルは若くして精鋭を父親から譲られているが、曹操の場合は宦官の子としての出自であり、董卓が洛陽を占領した頃にはまだ師団長相当の校尉程度の地位にあったことも考慮せねばならない。

カルタゴ滅亡へ

ザマの敗戦によって、カルタゴは無条件降伏。ローマの承認なくして戦争できないという条件が課されたのである。これがカルタゴの運命にずっと重くのしかかる。カルタゴの周囲にはヌミディアなどの敵性種族が蕃居しており、ローマに生殺与奪の権を握られたに等しかった。大坂冬の陣を思わせる展開である。大坂城は外堀を埋められ、次の夏の陣ではさらに不利な状況で戦わざるを得なかった。平和とはより有利な戦争をするための準備期間であ

る。同時に、戦争はより有利な平和を得るための政治的手段である。大坂冬の陣では講和して時間稼ぎをしているうちに家康が死ぬという幸運が起きることも十分に考えられた。しかし、カルタゴの場合は違った。講和の相手が1人の独裁者ではなくローマ政府であったこと、また、ローマ周辺にローマに立ち向かえるような潜在勢力は存在しなかったのである。幸運を期待し得ない場合、より不利な平和を甘受せざるを得ない講和を結んではならないのである。時間は敵か味方か、こここのところをよく理解していたのが諸葛亮孔明である。彼の場合には蜀が魏に攻められたわけではない。しかし、両国の国力差が拡大することが必至であり、坐して死を待つよりは、今、決戦することを望んだのである。同様に、日本を太平洋戦争開戦に踏み切らせた要因は「戦うなら今だ」という状況を作り出したアメリカの対日禁輸であり、ベトナム戦争では時間はベトナムに味方した（永井陽之助『時間の政治学』）。

ここで、カルタゴが直ちに滅ぼされたわけではない。それまでの約45年間、弱体化したカルタゴをどうにでもできるため、ローマのヘレニズム世界に向けた膨張が続く。

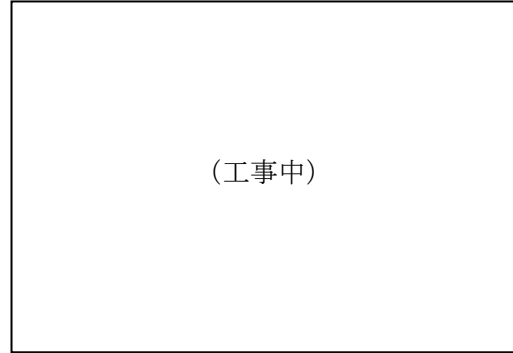
まずは、前197年、マケドニアの動きに対してギリシア勢力から支援の要請を受けたローマは、かつてのマケドニアとハンニバルの同盟関係を咎める必要性もあって出兵、これを撃破する。次いで、シリアが標的とされる。ギリシア内で弱い立場にいたアエトリア人がシリアに援助を要請、シリアのアンティオコス3世はマケドニアやギリシアへの勢力拡張の好機と考えヘレスポントを渡って侵攻するが、前191年にテルモピレーでローマに敗れ、翌年、ローマは逆に小アジア内に攻め込み、マグネシアにおいて再びシリアを破る。先述のハンニバルとスキピオの会談はこの戦いに先んじてローマがシリアに事実確認の調査団としてスキピオを派遣したときのことである。

前183年にピティニアに亡命していたハンニバルと、ローマで政治的に不遇であったスキピオがこの世を去り、前179年にはマケドニアのフィリップス5世も没する。これで第2次ポエニ戦争の立役者はほぼ退場することになるが、この頃からローマの対外政策はますます先鋭化し、前146年にマケドニアが属州化される。さらに常にローマの側に立って協力してきたロードスは小アジア内の領土を没収され、ペルガモンも危険を察知、アッタロス3世が自国を自発的にローマに献上し属州となった。今、トルコを訪れると、ペルガモンにあったギリシア様式の遺跡トラヤヌス神殿や劇場が観光地として遺されており、かつてそこに存在したゼウスの祭壇は、ベルリンのペルガモン博物館内に収容されている。

このローマによる地中海覇権の性質について、仮にカルタゴ帝国が成立したであろうと仮定した覇権の性質と比較して、栗田伸子氏は、「カルタゴ海上帝国が想定している世界は、政治的にはもっと多極的で、各地の文化的異質性が保たれているような世界だったのではないだろうか。のちのローマ帝国統治下の地中海世界のように上下の階層差はあっても地域差は少ない世界では彼らの商業は窒息したであろう。」と論じている。カルタゴは商売、結局はカネが行動原理であるため、文化的・精神的価値観には目をつぶり、地域の多様性が維持される



ペルガモンのトラヤヌス神殿



ゼウスの祭壇

という論理である。国際経済学における国際貿易に関する標準的な「ヘクシャー＝オリーンの定理」も国家間の生産要素存在量の差異に着目し、豊富に産出する産物を交換して相互の経済的利得を高めることができるとするものである。これに対し、ローマはギリシアから学んだ都市的生活様式を支配地域に普遍化することを行動原理としたのであった。

カルタゴもローマから幾度となく難癖をつけられ、ついに前 146 年、燃え盛る炎の中に跡形もなく滅亡、フェニキア人が世界史から姿を消すこととなった。この炎上するカルタゴに臨んで、かつてハンニバルのライバルであったスキピオの子供である司令官スキピオ・エミリアリスは傍らのポリビオスに感慨を込めてつぶやく。「我がローマも、いつかはこれと同じ時を迎えるであろう。」

このときから約 600 年を経た 476 年、ローマは西ゴート族らの蛮族の侵入によって滅亡。この蛮族の侵入を最後まで食い止めようとしたのは、ヴァンダル族出身のスティリコであった。

まとめ

カルタゴとローマの戦い「ポエニ戦争」から教訓を導こうとする文献として、森本哲郎『ある通商国家の興亡』と塩野七生『ローマ人の物語Ⅱ ハンニバル戦記』が存在する。両者とも 1993 年の刊行である。バブル経済の崩壊が誰の目にも明らかになってきた頃であり、日本を立て直したいという思いにも駆られたことであろう。

森本氏の場合には、日本在住であり、バブル期における日本の危うさへの思いがひしひしと伝わってくる。当時の日本はジャパン・アズ・ナンバーワン、あるいは金満大国とも言われ、米国等との経済摩擦に苦悩していた。ところが当の日本国民は、この経済力を自働化という美名の下での不払残業によって成り立たせていたため、短期の海外旅行でおバカギャルのようにブランド品を買い漁るときにしか体感できないのであった。日本はこの物語におけるカルタゴであり、嫉みによって世界中から袋叩きにあうという危機感が漂っており、カルタゴ

滅亡からの教訓を読み取らねばならないという想いがあったであろう。「カルタゴ人が陰気で、ユーモアを解さず、人生の喜びを知らない」、「われわれ（ギリシア人）は閑暇を持つために働くのだ」というところは、工場でせっせとモノ作りに励みオフィスで几帳面に書類を作る日本人と、他の先進国の人々の生きざまにそのまま当てはまる。そして、「武力によって立とうとする国は武力によって滅び、カネによって興る国はカネによって身を誤る」と。ただ、武力に奮わず、また、経済的に繁栄しない国や民族が容易に滅ぼされていったことも歴史の事実であることを忘れてはならない。

また、長谷川氏の『カルタゴ人の世界』も、「一般に商業と文化の発展は、おおいに結びつくものといわれている。たとえばギリシアの歴史を振り返ってみると、商業国アテネと農業国スパルタ、この二つのポリスにおける文化の質やその発展の度合いの差は歴然としている。商業で栄えたカルタゴが、何故独創的な文化をもてなかったのかという問題が生まれる。」と森本氏と同様の指摘を行っている。

次に塩野氏であり、さすがにイタリア在住だけあって、カルタゴ滅亡よりも、なぜローマが長く持ちこたえたのか、というところに主眼がある。彼女は『ローマ人の物語Ⅰ ローマは一日にして成らず』において、「知力ではギリシア人に劣り、体力ではケルト（ガリア）やゲルマン人に劣り、技術力ではエトルリア人に劣り、経済力ではカルタゴ人に劣っていたローマ人が、これらの民族に優れていた点は、何よりもまず、彼らのもっていた開放的な性向にあったのではないだろうか。」と述べ、「敗者でさえも同化するローマ人の開放性」を強調している^(注9)。これはつい先日までのアメリカにも当てはまるであろう。帝国を支える一つの精神的原理なのである。カルタゴに関しては、農業に生きるなど発想の転換ができなかったのか、という問いかけがなされているものの、眼はローマに向いている。最近の著作『ローマなき後の地中海』では、「そこは海賊の支配する海であった」と、大国ローマが安全という国際公共財を提供するパックス・ロマーナの意義を高く評価している。

このローマをアメリカ、地中海を太平洋と置き換えればどうであろうか。現在の国際情勢にそのまま当てはまる。ソビエト連邦崩壊、日本のバブル崩壊、アジア経済危機、そしてシリコンバレーに集積するIT産業の勃興によって、1990年代にはアメリカの一極支配が確立したかに見えた。その結果は、大義を欠き、特定産業の利益を剥き出しにして、国力の限界を超えたイラクやアフガニスタンへの侵攻であった。これによってアメリカは国力を浪費するとともに、自由の国、調停者としての大国という精神的支柱をも失い、その経済とパワーが揺るぎ始めているのである。

一極支配の是非について、塩野氏はローマに関しては是という考えのようである。ここで、非の面から考えてみたい。地中海をはさんだ二大国が戦い、第2次ポエニ戦争でカルタゴが敗者となったことで、ローマの一極構造が確立する。この時からローマの対外行動は徐々に帝国主義的色彩を帯びてくる。これは、ローマ人がそうするという意思を持ち始めただけで

はなく、世界の警察官としての役割を周囲から期待されることにもよっている。

このように、勢力バランスが一極に傾いた場合、他の国は事実の有無にかかわらず嫌疑をかけられ、制圧される。関ヶ原の戦い後、豊臣子飼いの大名がことあるごとに潰されていったようなものである。対ローマの合従連衡が成立しなかった背景として、それまでのローマの敗者をも同化する態度がカモフラージュとして効いていたと考えられるのであるが、仮に大同盟が成立したとしても当時は通信手段や輸送手段が限られて連携プレイが難しく、各個撃破に合ったのではないかと思う。軍団が独立した機能を持つ師団によって構成され、複数の師団が有機的に連携しながら戦を進めるようになったのは、電話や無線通信が可能になった最近のことであり、それまでは総司令官の目の届く範囲が一つの戦線であった。

今、アジア地域では新興国の台頭によりパワーバランスが大きく変化している。このカルタゴ滅亡の物語から教訓を読み取ろうとすれば、それは勢力均衡の重要性であろう。しかし、これは言うは易し、行うは難しである。高坂正堯氏は『古典外交の成熟と崩壊』において、メッテルニヒやビスマルクによって平和が保たれたヨーロッパ世界を分析している。しかし、他方で、「ヨーロッパの勢力均衡は、ヨーロッパが国際体系を構成しているという確固たる認識の上にはじめて成立したことをわれわれは忘れてはならない」（「アジア・太平洋の安全保障と地域協力」『国際政治経済システム 第4巻 新しい世界システム』）として、アジアには勢力均衡を機能させる共有の価値観がないことを指摘している。また、サミュエル・ハンチントンは、アジアでは歴史的に勢力均衡よりも付和雷同が行動様式となっており、「アジアが選択できるのは、紛争を対価とした勢力の均衡か、覇権を対価とした平和のどちらかである。歴史、文化、そして強国の出現の現実性から見ると、アジアは平和と覇権を選ぶ可能性が高い。」（『文明の衝突』）と論じている。勢力均衡が選択されようとする場合、その一方の極であるアメリカの外交がナショナル・インタレストと理念の間を振れる傾向があると同時に、民主主義の下で外交が冷静さと忍耐力の欠如というバイアスを受けることなく合理的な計算に基づくことがどこまで可能なのかということが成功、失敗を分かち重要な要素となるであろう。

【注】

(1) ウィリアム・ターナーのカルタゴに関する作品として、これ以外に、「カルタゴ帝国の衰退」や「吹雪、アルプスを越えるハンニバルとその軍勢」がある。

(2) モティアはシチリア西岸の島であり、現在では古代フェニキア人が持ち込んだとされる「モティア天然海塩」が有名。ウティカはカルタゴから約 30 km 北方、カディスはジブラルタルの北側に位置する。

(3) ローマ人がカルタゴ人を含めてフェニキア人をポエニと呼んでいたため「ポエニ戦争」と称される。

(4) 第一次世界大戦前にドイツ国防軍参謀総長シュリーフェンは、来るべき戦争は対仏・対露の二正面作戦であることを予想し、動員力に劣るロシアよりもフランスを先に叩くべきであるとした。このため、西部戦線に主力の大部分を集結させ、なかでも右翼のベルギー正面に攻勢主軸を置き、その左旋回によって英仏軍を包囲殲滅するという雄大な構想であった。しかし、この大戦で実際のプランを練った小モルトケはこの作戦を実行する胆力を持ち合わせず、右翼の比重を削減した他、東部戦線の比重をも高めて、重点の不明確なプランに変更した。その結果は西部戦線の膠着であった（渡部昇一『ドイツ参謀本部』）。もし、シュリーフェンプランの原案どおり実施されていれば、世界は息を飲んだであろう。

(5) 第二次世界大戦の西部戦線における戦いは、第一次世界大戦同様にドイツ軍の右翼であるオランダ、ベルギー方面からの攻勢によって開始されるというのが、大方の予想であった。しかし、これでは英仏軍との正面衝突になるだけであり、決定的勝利は困難である。そこで、参謀マンシュタインがベルギー南部とルクセンブルグのアルデンヌ森林地帯から機甲師団を核とする攻勢主軸を突出させる修正案を作成、採用された（リデル・ハート『ヒトラーと国防軍』（原書房））。これは後に戦略家リデル・ハートによって「敵の最小予期線に沿った縦深突破」と言われる間接的アプローチの代表例である。この作戦によってフランスはあっけなく崩壊し、スターリンも震えた。これと同じパターンが1944年12月にヒトラー最後の賭け「アルデンヌ反攻作戦」（映画では「バルジ大作戦」）として繰り返され、半ば成功しそうになる。もし、これが成功していれば、西側連合軍は大西洋の向こう側に追い落とされ、西進のドイツ軍を追った赤軍によってヨーロッパ大陸部は赤色に染まったであろう。

(6) ミーランは西域南道、タクラマカン砂漠南東部に位置するオアシス都市で、考古学者スタインによって発掘された。彷徨える湖として知られるロプノール湖北岸の楼蘭に近い。スタインによって搬出された有翼天子像はインド国立博物館に、大谷探検隊の一員であった橘瑞超によるものは東京国立博物館に所蔵されている。

(7) 古代ギリシアの貴族制をとるポリスにおいて、平民の支持を背景に独裁的権力を振るった政治指導者を僭主と言う。その背景には戦場における重装歩兵の役割が高まったことがある。

(8) この時期のハンノ家はアフリカの大土地所有者の利益を代弁し、シチリア死守への熱意が乏しかったとも言われる。

(9) 塩野氏と対立する見解として、ウィリアムソン・マーレー、マクレガー・ノックス、アルヴィン・バーンスタイン（「戦士国家の戦略」（『戦略の形成』第3章）は、ローマを「武

威を尊ぶ価値観と美德」を持つ戦士国家として描き、ローマ人の寛容性は、「その効果を見越した狡知である」、「ローマが時として示した慈悲の行為もまた、自国の国益を計算したうえで行われたものであった。」と述べている。

【文献】

カルタゴ中心の歴史

栗田伸子・佐藤育子『興亡の世界史3 通商国家カルタゴ』（講談社）、2009。

森本哲郎『ある通商国家の興亡 カルタゴの遺書』（PHP研究所）、1993。

長谷川博隆『カルタゴ人の世界』（筑摩書房）、1991。

長谷川博隆『地中海世界の覇権をかけて ハンニバル』（清水書院 清水新書 33）、1984。

歴史群像『特集 ハンニバル戦記』（学習研究社）、10月号、1994。

アラン ロイド『カルタゴ 古代貿易大国の滅亡』（河出書房新社）、1992。

ローマ中心の歴史

村川堅太郎『世界の歴史2 ギリシアとローマ』（中公文庫）、1974。

塩野七生『ローマ人の物語Ⅰ ローマは一日にして成らず』（新潮社）、1992。

塩野七生『ローマ人の物語Ⅱ ハンニバル戦記』（新潮社）、1993。

弓削達『地中海世界』（講談社 現代新書 312）、1973。

ウィリアムソン・マーレー、マクレガー・ノックス、アルヴィン・バーンスタイン
『戦略の形成』（中央公論社）第3章「戦士国家の戦略」、2007。